

## 巻頭言

# 特集「教会史におけるウェスレー」によせて

山内 一郎

今年、メソジスト運動の指導者ジョン・ウェスレー（1703～1791）の生誕 300 年にあたる。

George Cell が *The Rediscovery of John Wesley* を著したのが 1935 年、それはウェスレー没後 144 年のことであった。セルは宗教改革者、ことにジョン・カルヴァンの立場からウェスレーの福音主義的立場の再評価を試みたが、折しも日本より少し遅れてアメリカに伝わった弁証法神学（Neo Orthodoxy）の潮流との間にある種の共鳴現象が起こり、SMU（Albert C. Outler）、デューク（Frank Baker, Robert Cushman）、エモリー（Theodore Runyon）などメソジスト系大学や神学校におけるウェスレー神学の本格的研究の先鞭をつけた。

その後の研究者たちによる矚目すべき学問的成果については、例えば *John and Charles Wesley—A Bibliography*（単行本、論文など 4723 点を収録）ed. by Betty M. Jarboe, ATLA Bibliography Series, No. 22, 1987, 404pp. などに詳しいが、1991 年、ウェスレー没後 200 年を機に、或いはその前後から、セルの「再発見」後数十年を経て、ウェスレーの「再々発見」ともいべき気運が高まっているように思われる。その徴候として、まずウェスレー著作集全訂新版の編纂・刊行事業を挙げることができる。有名な Thomas Jackson 版が出たのは今から 170 年前のことであり、これは 40 版を重ねたが、Bicentennial Edition 全 34 巻は、綿密なテキスト批判に基づく全面的な校訂決定版と銘打たれ、準備に 20 年を費やし、刊行開始からすでに四半世紀を経過、現在 20 数巻出版されているが、完結までなお数年を要するとい

う実に 50 年を超えるロングプロジェクトである。デューク大学のフランク・ベーカー教授は編集主幹として夫人ともども、この共同作業のために捧げたが、地上で完結を見ることなく 1999 年 10 月 11 日、主のみもとに召された。さらにこの Wesley Works の新版刊行と平行して、近年次々と現れる欧米を中心とする研究モノグラフや論文集(アップ・ツーデートな文献については、たとえば Th.Runyon, The New Creation—John Wesley's Theology Today, Abingdon, 1998, pp259-265、清水光雄『ウェスレーの救済論—西方と東方キリスト教思想の統合』、教文館、2002)、また世界メソジスト歴史学会、国際ウェスレー神学学会、国際メソジスト関係学校・大学連盟 (IAMSCU)、そして四年前に発足した私たちの日本ウェスレー・メソジスト学会の活動など、ともかくウェスレーが幅広く奥行きのある創造的なインパクトを与え続けている証左を目の当たりにすることができる。私が神学生時代、青山学院の野呂芳男教授が宗教センターでウェスレーの現代的意義について講演され、「カール・バルトが読まれなくなることがあっても、ジョン・ウェスレーは読まれ続けますよ」と結ばれたのを聞いたとき、ずいぶん大胆な発言だと感じたが、今にしてなるほどと納得できるように思う。

ウェスレーは、キリスト教とは何か、福音とは何か、あるいはクリスチャンとは何かという問いに対して、単一ではない、複合的な答えを提示したスケールの大きな実践的思想家であり、その神学的発想がいわば多声音楽的であるために、心を静め、耳を澄ますと様々な響き(トーン)が聞こえてくる。学会誌本号は「教会史におけるウェスレー」特集であるが、基本的にはアングリカニズムおよびその背後にあるローマ・カトリックの倫理的傾向と宗教改革者ルターの「信仰のみ」「聖書のみ」を原理とする福音主義、さらには教理的には、カルヴァンのピューリタニズムとオランダのアルミニウス主義、いわゆる正統主義と敬虔主義、あるいは思想的な広がりの中では、中世以来の神秘主義や形而上学と 18 世紀の啓蒙主義や理神論、加えて西方神学と東方神学など、通常は対抗的な関係にある多様な宗教的、思想的系譜がことごとくウェスレーの中に流れ込んでいるために、教会史におけるウェスレーの位置づけの問題は決して容易に決着のつくものではなく、専門研究者の間にも、しばしば我が田に水を引く式の解釈が見られる。

戦前の関西学院神学部に招聘された教会史担当の曾木銀治郎教授がスコットランドに留学した折りの回顧録の中で、このように述べている。「かの地においては信仰と知識の見事なる一致を見た。メソジスト教会が信仰を力説するのはよい。しかし、それがために知識や理性を無視あるいは軽視してはならない。不幸にしてメソジスト教会にはいささか理性を軽視する傾きがある。わたしは常にこの点を遺憾に思っている。理性を無視し知性を軽視しては、思想界のリーダーシップをとることはできない。どうかわが教友の真剣なる考慮を希求する」。ここにはやはり看過し得ない誤解があり、日本におけるウェスレーの受容をめぐる問題が決して小さくないことが窺知される。

ウェスレーの動的な思惟構造や信仰理解を掴み得ないまま、例えば「キリスト者の完全」という教理についても簡単に常識的判断や俗流的批判を下すことが多い。あるいは矮小化され、誤解されたままのウェスレーに対する一定の評価が依然として乗り越えられない事情のあることも否めない。しかし、ウェスレーの本来的キリスト教の理解は、その社会問題への参与と相俟って、新約聖書が証言する福音に固有のパラドックス（逆理）を内包している。

ウェスレーのポリフォニックな神学的発想（動的「関係主義」）と霊的生活の実践（「心の宗教」）への強靱な呼びかけが、価値の多元化や複雑系の学問台頭、そして生きる意味や根拠を喪失し低迷を深めつつあるこの時代に対して、希望と癒しのメッセージとして普遍的な意味を再獲得しているのではないか。

（関西学院 院長）